

## 二律背反—『菊と刀』<sup>i</sup>を読んで日本の感性について得たもの

韋雨果

初めて見た日本は、モダンで地味な国でした。東京タワーに上ると遠い富士山の澄みわたる美しさを眺められ、スカイツリーのそばでは隅田川の清らかさを望めました。神社の傍で新幹線が飛ぶように走り、鳥居の外にある空港は往来が盛んでにぎやかでした。自然と人文が交わり、古さと新しさが衝突し、静謐と喧噪が重なり合う地でした。「万物並び育して相害せず、道並び行われて相悖らず」〔訳注：『論語』中庸〕という言葉があるように、東京の盛んな車の往来から北海道の生い茂った林が積み重なる青緑色まで、日本列島には調和しつつ万物が納まって、互いに照り映え、侵害しあわず存在していました。

再び日本を見たのは、アメリカの文化人類学者のルース・ベネディクトが著した『菊と刀』を通してです。この本で彼は、日本の近代に急発展した物質の成果を捨て、精神面から日本人と大和民族の性格を探究しています。この本を読んだ後、自身の日本に対する第一印象が、波がきらきらと輝く日本の氷山の一角に過ぎなかったと気づきました。日本はもっと重層的で、探求、発見、検証の待たれる要素も含まれていたのです。読み終えて気づいたことは、複雑さ、対立、互いの矛盾さえ、とっくに日本の文化の各方面に染み渡っているということです。

日本人は美を愛しつつ武力を乱用します。「月さすや谷をさまよふ螢どち」<sup>ii</sup>「もののあはれ」の美は江戸時代から風向き次第で夜に潜み、文学から文化に潜んで、日本の文化に不可欠な古い要素になっています。長谷川等伯はきわめて少ない線で数本の松の木を描きすぐ筆を収めながら、余白を生かして松林の深遠で静かなもの寂しさを描写しています<sup>iii</sup>。「幽玄」の美は百年前には浮世絵や水墨画の中で余白となり、黙々として日本人の独特な美学の文化の薫陶を受けてまた形作っているのです。大和民族はそれを自ら体験し実行して、一代一代と伝わって行って、「美を愛する」ことが国の主流になりました。しかし、古代の何度もの「合戦」であれ近現代の何度もの侵略戦争であれ、日本人は美を愛すると同時に美を壊し続けています。壊滅と殺戮の中で両手を鮮血で満たした日本の軍人は、それでも悠然と茶道や花道の美を楽しみ、自分の胸にある美が壊されると死をもって殉じました。秋の葉の静かな美のように、最後の一縷の美を添えていたのです。美を愛しながら美を壊す。武力を乱用しながら和を尊ぶ。

日本人は礼儀を尊びながらも戦いを好みます。祝日のたび神社の太鼓が響き、美しく輝く

のは日本街頭の常態で、祝日に対する尊重と伝承が、懇ろに礼儀を尊ぶその心を実証しています。謙遜語と敬語は複雑に入り組んでいて難解で、なのにさまざまな人が柔軟に応用しており、日本の首相でも宿泊したホテルの掃除係に心からの感謝状を書くことがあります。言葉と顔色で人の心を探ることが身につけられず、礼儀作法が分からないと、日本社会では立脚しにくいものです。しかし武士道精神に支配された彼らは、自分が死ぬか相手が死ぬかという最も野蛮な方法で対立を解決するのです。仇同志が会おうと、血しぶきが上がることとなります。他人の生命を非情にも剥奪していながら、敵討ちは礼儀を尊ぶ社会の中では「無礼」ではないものと黙認されます。決闘さらには謀殺まで、法律の原理を越えて許され、尊敬されることさえあるのです。生命の軽視により彼らの礼を尊ぶ精神は抛り所を欠き、矛盾したものに歪んでいます。

日本人は新しいもの好きで頑固です。彼らは大化改新、明治維新、戦後の再建による天地をくつがえすほどの変化を狂喜して受け入れながらも、とっくに時代遅れの煩わしい虚礼をなかなか変えられません。とっくにブルジョア革命を終えていながら天皇制の存続に固執。とっくに火器の時代に入っているのに、意地を張ってそれぞれ大戦場で刀を使い、かつて最も先進の大艦大砲を持っていながら、最も基本的なダメージコントロールと救援設備は不足……そのため、彼らは最も先進的な戦闘機を使って最も古い戦術である突撃を採用し、第二次世界大戦での悪名高い「神風特別攻撃隊」を結成し、新しいもの好きと頑固さを守ろうとしたのです。

日本人は服従しても飼いなさらされません。彼らは最も苛酷な命令に従いながら、矛盾して最も基本的な規範に背くこともあります。彼らは切腹自尽であっても上級の指令すべてに進んで従いますが、下克上もよく起こっていました。戦国時代に家臣が大名を転覆させ、大名が幕府を覆し、第二次世界大戦では下級の将校や士官が上官を暗殺する事件も頻発しています。規律が厳しい彼らは、同時に自由放漫で、両者はもともと共存できないはずなのに、ドラマさながら日本の文化の中で共演しています。

美を愛しながら美を壊し、礼儀を尊びながらも戦いを好み、新しいもの好きながら頑固で、服従しても飼いなされない。「並び行われて相悖り、並び育して相害す」が日本文化の現実になっています。こうした要素の抵触、矛盾、衝突、不均衡が寄り集まっているのです。現代日本の調和と暴力、謙虚さと積極性、モダンと古風、拘束と自由。すべては二律背反の中で盛んに芽生え、すべては二律背反の中で歪んで育ちます。『菊と刀』の中の日本は、難

解ながら心を奪うものがあり、人を賛嘆させながら意気消沈させるものでした。すべては平行して生まれ、二律背反の中でなお近代日本が育ったのです。

---

i 『菊と刀』、ルース・ベネディクト

ii 原石鼎の俳句

iii 『松林図』、長谷川等伯